

[果樹部門]

12. イチジク株枯病の新しい農薬「ICボルドー66D」

[要約]

ICボルドー66Dの2～4倍液は、イチジク株枯病に対して防除効果が高い。

[担当] 岡山県農林水産総合センター農業研究所 病虫研究室

[連絡先] 電話086-955-0543

[分類] 技術

[背景・ねらい]

県南のイチジクに発生している株枯病は、枯死に至る難防除病害であり、大きな生産阻害要因となっている。本病に対する登録農薬は少なく、薬剤耐性菌の発生リスクを抱えながらも同系統の薬剤を多用せざるを得ない。そこで、防除効果が高く、使用時期の適用が広いICボルドー66Dの登録促進を図り、効率的な防除対策に資する。

[成果の内容・特徴]

1. 鉢植え樹で、ICボルドー66D 2倍液の1 L／樹の株元灌注処理は、株枯病に対して予防効果が高い（データ省略）。
2. 圃場試験で、ICボルドー66D 2～4倍液の5 L／樹の株元灌注処理（図1）は、トップジンM水和剤500倍液の1 L／樹と比較して予防効果が高い（表1）。
3. ICボルドー66D 2倍液を灌注した株元土壌における薬剤の残効は、トップジンM水和剤より長い（表2）。
4. ICボルドー66D 2～4倍液の5 L／樹処理は、定植1年目の処理では新梢の生育抑制や激しい場合には苗木の枯死などの薬害がみられる（表1）が、2年目以降の処理では生じない。

[成果の活用面・留意点]

1. 本剤は2013年11月6日にイチジク株枯病に適用拡大されている（使用基準；2～4倍液の1～5 L／樹を株元灌注、使用時期・回数の制限なし）。
2. 本剤は罹病樹に対する治療効果は低いので、発病前から予防的に灌注処理する。
3. 定植1年目の幼木では薬害を生じやすいので使用を避ける。
4. 本剤の2倍液をバケツなどで灌注処理すると、薬液の成分が土壌表面で固まり、透水性が悪くなるため、乾燥後に砕いておく。
5. 「収穫29日前～収穫終了」に、これまで唯一使用できるオンリーワンフロアブルと組み合わせることで、オンリーワンフロアブルの薬剤耐性菌の発生リスクを減らすことができる（表3の体系防除例参照）。

[具体的データ]

表1 イチジク株枯病に対する IC ボルドー66D の効果と薬害（2012）

供試薬剤	希釈倍数、量 ^z 処理方法	供試 ^y 樹数	発病 ^x 樹数	発病 樹率 (%)	防除 ^w 価	主幹基部 ^v 直径(mm)	薬害 ^u
IC ボルドー66D	2 倍液、5L／樹 株元灌注	7.0	0	0	100	29.5±1.5	+
IC ボルドー66D	4 倍液、5L／樹 株元灌注	7.0	0.3	5.7	88.5	34.6±1.4	+
(対照) トップジン M 水和剤	500 倍液、1L／樹 株元灌注	7.0	1.0	14.3	71.1	33.5±1.6	－
無 処 理		7.3	3.7	49.4		33.8±0.9	

^z 薬剤処理；2012 年 5 月 9 日（人工汚染圃場）

^y 露地栽培。「樹井ドーフィン」、2 年生幼木。7～8 樹／区、3 反復

^x 2012 年 11 月 28 日調査。株枯病による株元の病斑または主幹内部病徴が認められた樹数

^w 防除価は発病樹率の平均値から算出した

^v 平均値±標準誤差を示す。

^u +；薬害あり、－；薬害なし

表2 株元灌注における薬剤の残効性（2012）

供試薬剤	希釈倍数 処理方法	株元土壌に挿した枝の発病 ^z
		処理 83 日後（8 月 1 日調査）
IC ボルドー66D	2 倍液 5L／樹 株元灌注	0／18（0%）
IC ボルドー66D	4 倍液 5L／樹 株元灌注	1／18（4%）
(対照) トップジン M 水和剤	500 倍液 1L／樹 株元灌注	8／18（44%）
無 処 理		13／18（72%）

^z 発病枝数／供試枝数（発病枝率%）



図1 IC ボルドー66D
2 倍液の処理状況
(周辺のシートは防草のため)

表3 薬剤の体系防除例

処理 時期	薬剤名・希釈倍数
【露地栽培】	
5月	オンリーワンフロアブル2,000倍
7月	トップジンM水和剤500倍
8月 収穫開始	ICボルドー66D 2 倍
10月 収穫終了	オンリーワンフロアブル2,000倍
【12月加温ハウス栽培】	
1月	トップジンM水和剤500倍
3月	オンリーワンフロアブル2,000倍
4月	トップジンM水和剤500倍
5月 収穫開始	オンリーワンフロアブル2,000倍
7月	ICボルドー66D 2 倍
8月 収穫終了	
9月	オンリーワンフロアブル2,000倍

[その他]

研究課題名：イチジク株枯病の生態解明と総合防除技術の開発

予算区分：交付金（病虫害防除農業環境リスク低減技術確立）、県単（現地緊急対策）

研究期間：2008～2013年度

研究担当者：井上幸次

関連情報等：[平成24年度試験研究主要成果、37-38](#)